

教 名 聞

第3号
(発行日)

2010年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
- 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
- 共学会—毎月6日午後7時始
- 真宗入門講座—毎月18日
午後6時半始
- *8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

ヴアラナシの風景

三年前の秋、インドの仏跡参拝に出かけました。釈尊成道の地ブツダガヤを出発し、翌朝ヴアラナシ駅に到着しました。ヴアラナシは火葬場を中心に発展したインド第一の宗教都市といわれ、その歴史は三千年におよぶといわれています。

午前中は釈尊最初の説法の地であるサルナトを参拝。日が暮れてガンジス河の河畔でのヒンズー教の儀礼を見物しました。対岸はまっ暗闇です。神々への讃歌がシタールとタブラーの演奏の中で歌われ、若い僧たちが火を焚き供物をささげ、舞いながら神々に祈るのでした。時には集まって集まる群衆も共に神の讃歌を歌いました。

翌朝早く、ガンジス河岸から小舟に乗り、対岸から朝もやの中に昇ってくる赤い太陽を見ました。多くのヒンズー教徒たちが河に入り沐浴をし、神々に祈っています。突然、何とも言えないメロ

デーがスピーカーから流れてきました。どう言っているのか、これほど「人生ははかなく、幻のごとし」と感じさせるメロディを聴いたことがありません。魂を奪われましたが、それほどまでに感じたのは、ヴアラナシの風景であったのだと思います。

というのは、この河岸には寺院が建ち並び、二つの火葬場があります。火葬場では遺体が次々に運ばれて目の前で薪の火によって焼かれていきます。年間二万人以上が火葬されるといわれています。煙が立ちのぼり、その下で幼い少女が遺灰を無造作にバケツに集めて、河に捨てていました。一そうの舟がやってきて、〈遺体を焼く薪が買えない人のために寄付を〉と呼びかけてきました。

ヴアラナシは三千年以上も火葬を続けてきた場所です。ここで火葬されてガンジス河に灰が流されると良き天界に生

まれることが約束されるといわれ、ヒンズー教徒にとっては非常に願わしいこの世の最後の場所とされています。そしてここでは生前の地位や身分や財産の有無は関係ありません。王侯貴族も乞食も平等に焼かれ、ガンジス河に灰は流されます。

日本では遺体は、コンクリートの建物の中で、遺族の目にさらされることなくこっそりと速やかに焼かれます。遺族は後で遺骨を拾うだけです。

ところがヴアラナシでは遺体は遺族や衆人の目の前で焼かれ、煙はたちのぼり臭いはたちこめています。これが人混みあふれる街のすぐかたわらで昼夜行われるのです。人間が死して灰になることは隠されるべき事ではなく、生あるもの当然な結末として、日常にまでなっているのです。

日本では死ぬことは何かしら「あつてはならないこと」「非日常的なこと」のように取り扱われていますが、ここでは「人はすべて死ぬ存在で

ある」ということが実に露わになっていきます。

しかしヴアラナシは火葬だけの街ではありません。ヒンズー教徒にとつて再生ないしは解脱への祈りの場でもあります。聖なるガンジス河で沐浴して祈るなら、善き解脱の境界に生まれると信じられています。ですからインド各地からおびたたい人たちがやってきて、火葬場のすぐ近くで河水につかり熱心に祈ります。しかも浄らかな来世に生まれかわるといふイメージを彷彿とさせるのは、毎朝、建物が一つもない対岸から太陽が昇ってくる風景です。没したいのちがまた新たによみがえるようなイメージが自然に湧いてきます。対岸は不浄な地と呼ばれて何も無いところですが、私には清浄な領域とすら感じさせられました。

というのはガンジス河のこちら側は建物が密集し、喧噪と汚れと欲望と混沌がらつぽと化した濁世そのものとして感じられないのに対して、対岸は静寂で広々とし明るく美しさがあつて、その風景はこの穢土を超えた浄らかな世界がましますというこ

とを連想させられます。生と死そして来世への祈り、それがむきだしになっている街、それがヴァラナシです。

私たちはヒンズー教徒ではなく仏教徒です。ですから河で沐浴しようとは思わないし神々に祈ろうとも思いません。釈尊も「河の水で沐浴をしたからといって己の罪は除かれない。罪を浄化するには法（真理）を得なければならぬ」と仰せられています。

ただ現代の日本人は、死の不安がありながら死に対してまともに向き合わず、また死してどこへ行くのかも問題とせず、生きている間の娯楽や享楽で死や死後の問題をまぎらかしているように思います。

しかし、死は生から生への通過点であることを感知させられるヴァラナシの風景は、私に「あなたは必ず死ぬ。その死をあなたははどう受け取り、死んでどこへ行くこうとしているのか」と問い、それは同時に「あなたにとって南無阿弥陀仏は何を告げているのか」と問われているように感じました。（了）

正信偈に学ぶ問答

（三十四）

撰取心光常照護

已能雖破無明闇

貪愛瞋憎之雲霧

常覆真實信心天

譬如日光覆雲霧

雲霧之下明無闇

（書き下し文）撰取の心光、常に照護したまう。すでによく無明の闇を破すといえども、貪愛・瞋憎の雲霧、常に真實信心の天に覆えり。たとえば、日光の雲霧に覆われるれども、雲霧の下、明らかにして闇きことなきがごとし。

（現代語訳）阿弥陀仏の光明はいつも信心の人を撰め取ってお照らし下さりお護り下さる。すでに無明の闇ははれても、貪りや怒りの雲や霧は、いつもまことの信心の空をおおっている。しかし、たとえば日光が雲や霧にさえぎられなくても、その下は明るくて闇がないのと同じである。

*

G 「へ撰取の心光、常に照護したまう。すでによく無明の闇を破す」ということは、阿弥陀仏の撰取の光にであった信心の人は無明の闇が破れるということですね。では、無明の闇とはどういう意味でしょうか」

D 「無明とは真実に明らかでないこと、すなわち根本的な迷いのことで、一切の苦しみの元といわれています。そしてまた、生まれかわり死にかわりしていつまでも流転を続ける因であるといわれています」

G 「では真実に明らかでないという、その真実とは」

D 「それは縁起の道理とか、自他一如の真実といわれています」

G 「信心は生死流転を超え、浄土に生まれて仏となる正しい因であるとお聞きしていますが、そうすると信心をいだくということは無明が除かれ、もはや流転しなくなるのですね」

D 「ええ、そうお聞きしています。ここを聖人は往相の一心を發起するがゆえに、生としてまさに受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。」

といわれています。往相の一心とは信心のことです。六趣・四生とは迷いのいろんな生存形態のことです。迷いの生存形態の因がなくなるから迷いの結果も起こらないといわれるのです」

G 「難しい表現ですね」

D 「表現は難しいですが、要するに信心をいただいた人はもう二度と迷いの境界を繰り返すことなく、大いなる覚りの境界に至るといふことです。こういうことをこそ真に喜ぶべきことなのでしょう」

G 「無明が現実化するかどうかという事態になるのですか」

D 「無明とは縁起の道理・自他一如の道理にくらいことですが、それをもう少し身近に引き当ててみると、自我を自分としてみることだといっているのではありません。自からと他（他者、他物、世界）とを分けて、他と別に立てた（自我）が自分だと思ひ込んで疑わず、そこから一切を考えているあり方でしょう」

G 「そういうように自我が元になるとどうなるのですか」

D 「そうすると、一番可愛いのは自我である俺であり私となりましょう。その自我は肉体と同一化する、いわば肉体を自分自身だと思ってしまうから、自我を愛することは肉体に深く愛執するようになります。そこからどこまでも俺が可愛い、生きのびたい、病気になるたくない、歳を取りたくない、生き延びるためにはもつと金がほしい、と思ひ、また人に負けたくない、人に評価されたい、などの我執我愛の煩惱が盛んに起こってきます。そしてどこまでも自我に都合のよいものを追っかける、それを貪愛」といい、その反対が瞋憎です」

G 「瞋憎というのは、怒りとか憎しみですね」

D 「ええそうです。自分にとって都合の悪いものを憎み嫌う心です。生きたいけど死なねばならないゆえ、死を一番憎むようになりまふ。また死ぬことに近づく老いとか病いなどを嫌うようになりまふ。また自分が可愛いのですから、自分に不利益を与える人を憎み、そしり、責め立てる

ます。ここを聖人は往相の一心を發起するがゆえに、生としてまさに受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。」

ます。ここを聖人は往相の一心を發起するがゆえに、生としてまさに受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。」

といわれています。往相の一心とは信心のことです。六趣・四生とは迷いのいろんな生存形態のことです。迷いの生存形態の因がなくなるから迷いの結果も起こらないといわれるのです」

G 「難しい表現ですね」

D 「表現は難しいですが、要するに信心をいただいた人はもう二度と迷いの境界を繰り返すことなく、大いなる覚りの境界に至るといふことです。こういうことをこそ真に喜ぶべきことなのでしょう」

G 「無明が現実化するかどうかという事態になるのですか」

D 「無明とは縁起の道理・自他一如の道理にくらいことですが、それをもう少し身近に引き当ててみると、自我を自分としてみることだといっているのではありません。自からと他（他者、他物、世界）とを分けて、他と別に立てた（自我）が自分だと思ひ込んで疑わず、そこから一切を考えているあり方でしょう」

G 「そういうように自我が元になるとどうなるのですか」

D 「そうすると、一番可愛いのは自我である俺であり私となりましょう。その自我は肉体と同一化する、いわば肉体を自分自身だと思ってしまうから、自我を愛することは肉体に深く愛執するようになります。そこからどこまでも俺が可愛い、生きのびたい、病気になるたくない、歳を取りたくない、生き延びるためにはもつと金がほしい、と思ひ、また人に負けたくない、人に評価されたい、などの我執我愛の煩惱が盛んに起こってきます。そしてどこまでも自我に都合のよいものを追っかける、それを貪愛」といい、その反対が瞋憎です」

G 「瞋憎というのは、怒りとか憎しみですね」

D 「ええそうです。自分にとって都合の悪いものを憎み嫌う心です。生きたいけど死なねばならないゆえ、死を一番憎むようになりまふ。また死ぬことに近づく老いとか病いなどを嫌うようになりまふ。また自分が可愛いのですから、自分に不利益を与える人を憎み、そしり、責め立てる

のです。また自分が周りの人から高く評価されたいですから、自分よりもっと優秀な人をねたむ心がたえないのです。嫉妬心は瞋りの心の一種です。へあんな人はおつてほしくない」という浅ましい心です」

D 「特に現代のような競争社会では、能力とか成績とか財産の有無などで人を評価します。そうすると、人と自分を比較し、できるだけ人よりも優位に立ちたいと思い、自分が周りの人たちからどう評価されているかが気になります。そして能力や成績が悪いと落ち込み、自分は駄目な人間だと失望してしまいます」

G 「自分を他者よりも高みにおかなければ幸せでないと思ってしまうのは、すでに自分と他者とを分け隔てて、孤立した自分に深く執着しているのですね、これは無明のなせるわざなのです」

D 「ええそうです。仏教は心の根にある無明こそ貪愛瞋憎

の煩惱の因であり、その因が除かれなくては真の安らぎも平和もこないという洞察をしているのです」

G 「仏教は深い洞察をしていると思うのですが、仏教を学ぶ人は少ないですね」

D 「ええ、仏教を知らないということもありますし、また私たちはとかく目が外に向けて自分に起こってくる苦しみの原因を自分の中に深く掘り下げることが苦手なのですね。他者との勝ち負けや優劣で苦しんでいても、苦しみの淵源が自分にあるという方向へはなかなか目が向かないのですね」

G 「自分の心に一番の問題があるのです」

D 「ええそうなんです。ですから解決の方向は、結論的にいいますと自分の心の中に仏心の光を迎え入れることなのです」

G 「仏の光を迎え入れるには、どうしたらいいのですか」

D 「阿弥陀仏の本願を信じてことです。そうすると阿弥陀仏の心の光が私の心に入ってくる。それを無明の闇が破られるといわれるのでしよう」

G 「なぜ仏心が私の心に入ってくるか」と無明が破れるのでしようか」

D 「それは先ほどから述べている自我が自分であり主体であると思っていたのが、阿弥陀仏が私の主（あるじ）でありまことの親であることが知らされるからです。いわゆる主客が転換するということが起こるのですね。それが無明が破られるということではないでしようか」

G 「阿弥陀仏のお心が私の心に入ってくる、阿弥陀仏の方が主人であり、自我はお客様の立場に代わることなのですか」

D 「ええ、自我しか知らない間は自我が主人で、いわゆる自我中心の人生であったのが、阿弥陀仏が私の人生の中心になるということすね」

G 「そうすると、本願を信じると仏心が私たちの心に届いて、自己生存の主体と想ってきた自我が転換されて、如来が主体となるのです。それは縁起の道理とか自他一如の道理とはどういう関係にあるのですか」

D 「そういう道理を知る智慧は無我の智慧ともいわれま

体ではなく法（真実、如来）が主体であることを知る智慧でもあるといえましょう。そうすると、如来に撰取されることは如来が主体になることですから、無我の道理にふれたといえるのではないでしようか」

であることが知れるのでしようが、実際の日常生活では、自我がしばしば主のように思ったりふるまったりしてしまうのです」

D 「ええ、悲しいことですが。そのことを、次ぎに、常に貪愛瞋憎の雲霧が湧いているというお言葉で示されているのです。自我が私の主体のように思うと我執我愛の煩惱が次々に起こりますから」

G 「そういうことですか」

D 「道理からいえばそうだとはいえませんが、ただ生活上の実感となると、少なくとも私の場合はその実感はほのかです。現実的には、自我が主人のような顔をしゅっちゅうしながら生きています。おぼろげな感じがしますが、ただ南無阿弥陀仏と聞く時、へあ、阿弥陀様がいて下さる。親様がいて下さる」と、自分の主は阿弥陀仏であることをそのつどほのかにお知らせをいただくのです。そしてやがてこの世が終わるときには、阿弥陀仏の御心が私の心を全面的に占領して、自我を根こそぎ滅して下さるとお聞きしていただきます。有難いですね」

G 「信心をいただいたとき、道理的には阿弥陀仏が私の主

信心夜話

『一蓮院秀存師の語録』(一)

(太字の文が一蓮院師の言葉です。カッコ内は私の所感)

*

(一蓮院秀存師(一七八八〜一八六〇)は江戸末期の大谷派のご講師で、真宗学を究められた方であるが、それ以上に特筆すべきは、生涯謙虚に聞法には励んだ信心の厚いお方で、多くの同行に慕われ敬われた明師であった。一代の碩学香月院深励師の門下である。師がそのつど語られた言葉が語録として残されているが、真実の言葉は時代を超えて響くものである。語録には真宗信心の深い領解が語られているので、座右において味わうには最も適したものである。また、未だ信心の世界に入らんとして入れない人にとっては益するところが大きいであろう)

○信次郎への仰せに、一生が間、骨を折りて聴聞はしてみただけでも、どうなるでもこうなるでもなかった。もう如来様が助けてやるというておくれるのであった。これは三国へひびくほどの大学者でも知ることは叶わぬ。

(信次郎というのは高野信次郎という人で、師の身边のお世話をしていた人であ

る。この人も聞法に心がけた尊い信心の人であった。この言葉は、晩年の師が一生聞法を続けてきた結果としての実感を信次郎氏に述(べられたものである)。

長年、真宗の学問にも聴聞にも力を尽くしてきた結果は、自分が少しでもどうかなくなったわけではなかった、といわれ、それにつけてもいよいよ有難く仰がれるのは、ただ(助けてやる)(引き受ける)という阿弥陀仏の仰せ一つである。これは師のいつわらざる実感であろう。非常に有難い言葉である。

とかく熱心に聞法することによって、有難い信者や深い領解の人や智慧が身に付いた者、あるいは助かりえる人間、そんな人間になろうとして聞法をする。いわゆる自分の心に仏法の色を付けようと聞法する。そして少しでも喜べるようになったら、そうなったことを喜ぼうとする。また信者らしい行いや心がけができると、できる人になったことを喜ぼうとする。そのような値打ちのある人間になろうなろうとし、少しでもなれたらそれを当てにしたり、「これでこそ助かる」と喜んだり安心したりする。

自分は聞法すれば少しはどうかかなりうるといふ、そんな自分を当てにすると危ないのである。自分は、一時的にはそうなれても、また元の木阿弥に戻りかねない、実に頼りない存在である。この世のものは、物にかぎらず人間の心も、でき

たものは壊れる。縁がくれば壊れる可能性のあるものに寄りかかると必ず不安がある。喜べたことを喜んでいると、喜ばなくなると苦しむ。分かったことや納得したことを当てにしていると、分らなくなったり納得できなくなると道を見失う。自分でつくった信心は壊れる不安をいつももっている。

師は、聴聞を重ね重ねた結果は、(どうなるでもこうなるでもなかった)、聞法する前の生まれつきの、仏法の色のつかない、なんともなっていない我が身であるといよいよ知らされる。そんなわが身に阿弥陀様が(助けてやる)とすでに仰せつめ仰せ下さっている。その阿弥陀様にまるまる助けられるばかりで、その外になにもない、と。

このことは非常に単純なことであるが、仏教の学問をどれほど極めた大学者でも、(如来様が助けてやる)に実感的な経験としてあわねば如来大悲の真実を決して知ることはできない。

私たちは熱心に聴聞をしているようであるが、いつのまにか我が心に仏法を聞かせようと計らうのである。聞いて助かろう、分かって助かろう、信じて助かろう、と仏法を心に植え付けることに力を入れてしまうのである。そうしてまだ駄目だ、まだまだだと、ぐずぐず言い続けるのである。これみな(どうかかなろう)

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(水)午後二時始

講師 能登教区・清琳寺住職 法岡龍 夫師

*なお、十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

(なんとかなろう)との我が計らいのすがたである。ところが師は(どうなるものでもこうなるものでもない)、どうにもなっていないそんな者だからこそ、すでに阿弥陀仏は(助ける)(引き受ける)と仰せ下さっているじゃあないか、と。

大悲をお伝え下さるご親切の言葉であり、ご自身の実感そのものである。師は決して本心を隠してへりくだっておしやっているのではない。ありのままを語られるのである。このほかにさらに何か奥深きことがあるのではない。法然聖人の仰せに(此外におくふかき事を存せば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし)とあるが、ここでも同様である(了)